

## 発表者と発表要旨

### 口頭発表

#### 1 品川区教育委員会 学務課長 古里兌夫

##### 「品川区立小中学校における動物飼育支援活動について」

本区の小中学校では約25種、個体数で1300の哺乳類・鳥類・魚類等が飼育されています。これらの学校では飼育動物が子どもたちと共に成長し、命の尊さ、不思議さを伝えています。しかし、校舎、校庭の制約や指導にあたる教員の知識不足などから、十分な飼育環境や指導内容を提供できない悩みを抱える学校も少なくありません。折しも東京都獣医師会品川支部より、協力の申し出を頂き、動物飼育を手助けするしくみに取り掛かることができました。その結果、昨年8月には「品川区立小中学校における動物飼育支援活動に関する協定書」を同支部と締結しました。今回はこの経過と課題について報告します。

#### 2 豊島区立西巣鴨幼稚園 大森理枝子副園長 亀谷まり子園長

##### 「いのちが育むいのち」

本園は本年度、豊島区教育委員会のプロポーザル制度による特色ある学校づくり推進園として、飼育動物を中心に生き物、様々な人、そしてものにまでかかわりを広げて、生命の大切さを感じ取る感性を育てる取り組みを行っています。ねらいとしてその先にあるものは、友達の思いに気づき、自他共に受け入れ合える子どもを育てることです。園の動物は、入園当初、友達の存在や人とのかかわり方がわからない子どもにとって、初めて、外の世界に心動かす存在です。また、仲間のある子にも、思いを共有したり、よりよい人とのかかわりの場を提供してくれる存在です。お世話の共同作業も、仲間作りを手伝います。

#### 3 北海道大学 武島幸太郎\*, 山田優士\*, 中田龍太\*, 小杉則彬\*, 鈴木 誠\*\*

(北海道大学1年\*, 北海道大学大学院教授\*\*生物教育学)

##### 「小学生のカエルの飼育における教育的効果」

現在、学校では蛙は愛情飼育としてではなく、学習教材として飼育される場合が多い。またその数は少ない。子ども達が蛙に対し「かわいい、好きだ」と思えるようになれば、他の恒温動物と同様に、愛情飼育と理科飼育の両方の面で活躍できる飼育動物になるのではないだろうか。そこで、小学生に実際に蛙を飼育してもらい、子ども達に及ぼす影響を様々な角度から分析した。その結果、愛情飼育としても可能であることが明らかになった。

#### 4 美濃市教育委員会 学校教育課長 小椋郁夫

##### 「動物を飼育した子どもや教員の感動の体験」

- 4059名の子どもと161名の教員のアンケートより -

4059名の子どもと161(112校)の教員から、飼育してうれしかった・分かった・悲しかった・困った・分からないなどの感動の自由記述アンケートを得た。その結果、「生

と死」・「元気と病気」・「食（喜）と糞尿（悲・苦勞）」・「なつくとなつかい」という相対項目の感動、「いのちあることの再発見と再認識」・「自分と同じであること」・「自分だけでは生きていけない」などの「飼育することによって味わう事が出来る感動が表出した。

## 5 「学年飼育に関する児童の声と鳥への認識調査結果から」

### 西 勝海 厚木市立愛甲小学校教諭

3年生がセキセイインコを学年飼育した感想を具体的に調査した。児童は飼育活動に楽しい感想と嫌な感想を持っているが、飼育活動の継続は児童のほぼ全員が欲していた。また、鳥類への興味関心の差を同地区内他校の無体験3年生と比較調査した。描かせた鳥を7視点3ランクの枠で比較すると、飼育経験校は12～0/21ポイント、無経験校は8～1/21であった。鳥10種の認識率結果は低率5種で2校に差が見られた。なお、本校背景となる地域の小学校の動物飼育状況は31校中26校で、飼育委員会による世話が22校、学年飼育が2校、教師によるものが2校であった。

## 6 全国学校飼育動物獣医師連絡協議会 中川美穂子

### 「学年で飼育した小学3～4年生の自由研究」(3学期の研究発表会より)

西東京市では19の市立小学校のうち半数以上が4年あるいは3年で飼育舎または校舎内で飼育活動をしている。そのうち総合の時間にいちづけて飼育活動を年間計画にそって授業に活用している市立保谷第二小学校と同柳沢小学校での事例から、3学期に新学年に飼育を引き継ぐ集会での様子を紹介したい。その集会で子どもたちは、クラスごとにテーマを決めて動物を紹介し、かつ班活動としてさまざまな課題研究発表をした。

## 7 町田市立大戸小学校 池上久子教諭

### 「つなぐれ命の学び、動物飼育体験教育！」

#### ～地域・保護者をつくる支援システム構築と教育的効果～

獣医さんの支援を受けながら、全校で取り組む「ふれあい活動」を実施して4年。子ども達は、世話をしながら愛する動物達の病気やケガ・死を目の当たりにし「命の尊さ」を実感としていくつも体験してきた。休日の飼育については保護者・地域の方が「ふれあい活動推進委員会」を立ち上げ規約も設け組織的に運営してくれるようになった。支援体制が整ってきた本年は、ふれあい活動をベースに飼育活動をとって、授業に生かす工夫を実践・研究している。

(早川たけ子副校長)

## 8 中野区立鷺宮小学校 吉本恒幸校長

### 「いのちの教育を実践するための道徳教育の実践」

全校でのこの実践にあたり、「いのち」の概念を、生物的不いのちと精神的いのちとして捉えた。さらに生命を 共存性・共生性 有限性・唯一性 連続性・継続性 神秘性・

偶然性の4方向から捉えることにより生命がかけがえのないものであることを子どもたちに理解させようとした。指導に当たっては、「総合単元的な道徳学習」を実践するとともに、「いのちの輝きを確かめる活動」として動物飼育活動を位置付け、飼育舎の学年飼育（中学年）と学級飼育（低学年）を行った。

## パネル発表

### 1 名古屋女子大学文学部児童教育学科 4年 原由希子 荒川志津代 教授

#### 「就学前施設における昆虫飼育に対する指導者の意識 - A町の場合 - 」

保育所や幼稚園などの就学前施設では、生きた体験として生き物と触れあう活動を大切にしている。しかし、ウサギや鳥などの比較的大きな生き物に比べて、昆虫類の扱いは無頓着に行われがちである。命を大切にするという同じ理由で、触れることを禁止する者もいれば奨励する指導者もあり、扱いも多様である。

そこで、昆虫飼育はどうあるべきかを考えるための第一歩として、保育士などの指導者が、昆虫飼育についてどのような考えを持っているかを調査した。

### 2 鷲見辰美 筑波大学附属小学校教諭

#### 「心を育てる教室飼育システム～友への気遣いを育てる」

入学した当初、ぴくっと動くモルモットに、顔をしかめながら後ずさりしていた子がいた。しかし、その子が3年生になったとき、1年生にモルモットの抱き方を上手に教えていた。その子にとっての成長は、モルモットを抱くことができるようになったというだけではない。それがほんの些細なことに感じられるほど心の成長がみられたのである。

教室における動物飼育の効果、そして様々な問題に対する指導方法のあり方について発表したい。

### 3 濱野雅章 学校法人 浜の真砂学園 明成幼稚園園長

#### 「2 / 5 月曜日 晴れ・・・だけどみんなの心は雨～さようなら、リボンちゃん！」

幼稚園のうさぎ達、園庭の隅で一部の子ども達としか触れあえなかった。今はもう子ども達の生活の一部。園内のメインの場所に移され、ケージの掃除をしたり、エサをあげたり、用事もないのによりそったり、子ども達のすぐそばに彼らはいます。ある日の朝、そんな「仲間」が冷たくなっていました。子ども達の心には・・・

### 4 台東区立富士小学校飼育委員会

#### 「私たちのウサギ、グリとグラ」

昨年、長年飼っていたウサギのディールを亡くしました。この悲しい体験から沢山のことを学びました。その気持ちを大事にしてほしいということで獣医師さんから、二匹のウサギをいただき、全校で名前を公募「グリとグラ」と命名しました。

小さかったグリとグラも大きく成長して。今は楽しみながら飼育活動をしています。

## 5 草野 健 昭和女子大学附属昭和小学校教諭

### 「理科室にウサギがやってきた！～3年目の実践記録～」

平成 17 年 6 月。昭和小学校の理科室に 1 羽のウサギがやってきました。筆者が学校生活で友人関係がうまくいかなかったり、悩みがあったりする児童の気分転換になるのではないかと考えてウサギをもらってきたのでした。すると、すぐに生活面にやや問題を抱える児童を含む数名が積極的に世話をを行うようになりました。その後も「来るもの拒まず、去るもの追わず」の精神で飼育活動を行ってきた実践を紹介します。

## 6 林 創一 社)茨城県獣医師会

### 「茨城県の学校獣医師制度」

茨城県では平成元年より「動物ふれあい教室」事業を行ってきましたが、平成 15 年より始まった茨城県動物愛護推進計画に基づき、発展的に「学校獣医師設置モデル事業」を行い、希望校に学校獣医師を設置し、茨城県獣医師会所属の開業医を派遣しています。

学校獣医師は、飼育動物の保健衛生 適正飼育 児童への情操、教育的効果 動物ふれあい教室などを行っています。また、毎年 1 回、教育委員会と協力して、本研究会の運営委員等を招いての講演、事例発表などの教員研修を開催しています。

## 7 社)東京都獣医師会品川支部 松永義治 古谷隆俊

### 「品川区の動物愛護作文コンクール」

品川支部では、区立小学校児童を対象に動物愛護の作文コンクールを昭和 57 年から開催しています。昭和 60 年からは品川区教育委員会と共催し、今年で 26 回目を迎えました。優秀な作品に対して毎年、表彰式を行い、それらを作文集にまとめてあります。ここに、それらの文集を展示し、品川の獣医師会の動物愛護事業の一端を紹介しますので、動物との交流が子どもたちに弱いものに対する思いやりの気持ちを広げているのをご覧ください。